

大理石と美しいモザイク壁画、フィレンツェの老舗インテリアブランド、パリディ社製の大時計など、贅を尽くした空間でゲストを迎える「ザ・レヴェリー サイゴン」のレセプションエリア。

## ホーチミン Ho Chi Minh

天然石とゴールドでまとめられた優雅なエレベーターホール。絶部に至るまで美しさにこだわったため、ホテルの完成まで7年を要した。



## 新旧のコントラストが楽しい ホーチミンの街

2015年のGDP成長率がインドに次ぐ高成長を記録するなど、伸び盛りのベトナム経済を体现するかのように、ホーチミンでは高層ビルやマンション、ホテルの建設、ベトナム初の地下鉄の整備が急ピッチで進められていた。

宿泊はドンコイ通りとグエンフエ通りに面した6つ星ホテル「ザ・レヴェリーサイゴン」を選んだ。2016年に米国の旅行誌「コンデナスト・トラベラー」にて「最も卓越したホテルのひとつ」と紹介された気鋭のホテルである。

手がけたのは、ホーチミンで数々のホテルや商業施設を運営するタイムズ・スクエア・グループ。海外に向け、従来のベトナムのイメージを覆す唯一無二のホテルを目指したと言う。まずこだわったのがデザイン。天然石やモザイクを駆使したロビー・スパ、レストラン、客室に至るまで、コロンボスタイル、ヴィジオネアといったイタリア最高峰の家具ブランドを取り入れた。これに風水の要素を加え、新たなベトナム・モダンラグジュアリーを掲示したのだ。

たとえば7階のメインロビーにある大時計は、19世紀創業の老舗



イタリアの高級家具やファブリックを配したジュニアスイート(右)。青と白の大理石で彩られた洒落たエレベーターホール(左)。

## THE REVERIE SAIGON ●ザ・レヴェリー サイゴン

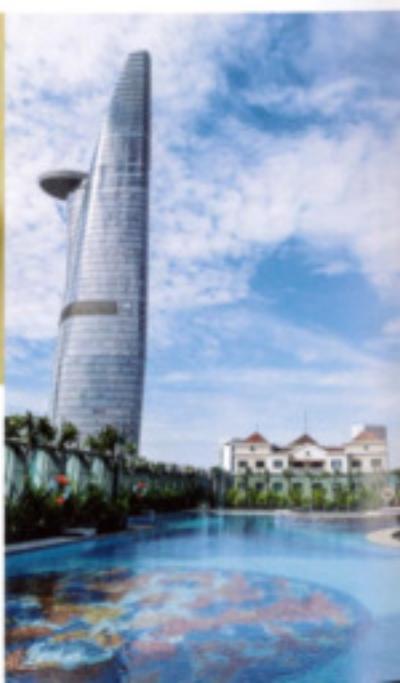
ホーチミンの中心部に建つ高層ビル「タイムズスクエア」に2015年9月開業。客室は高層階に位置し、その眺望はベトナム一との呼び声も高い。また、共用部や客室にはイタリア産の天然石やモザイクが配され、まさにレヴェリー(夢想)の趣だ。上質な家具やシャンデリアを備えた客室は全286室。寢室やバスタブの意匠に見下ろすホーチミンの光景は圧巻。オールディダイニングからカジュアルなバー、広東料理、イタリアンなど、レストランも充実している。

22-36 Nguyen Hue BLVD. Dong Khoi ST.  
District 1, Ho Chi Minh City, Vietnam  
☎+84 8 3823 6688  
<http://www.thereveriesaigon.com/>

※「ザ・レヴェリー サイゴン」に宿泊する  
TS CUBIC CARDゴールド会員さま  
特別企画ツアーをP18~19でご紹介しています。



通年利用できる屋外プールは、水中に音楽が流れれるサウンドシステムを採用。夜は水中が美しくライトアップされる(右)。香港のスターシェフが腕をふるう「ロイヤル・パビリオン」で洗練の広東料理を楽しむ(左)。





19世紀末に建てられた聖マリア教会。ネオ・ロマネスク様式で、建材はすべてフランスから運び込まれた。ホーチミンがかつて“サイゴン”と呼ばれていた時代を代表する建物（上）。ホーチミンの日常風景。公共交通機関がバスのみのホーチミンでは、バイクは必須の交通手段だ（下）。





ルネサンス様式の人民委員会庁舎。「東洋のパリ」と称された面影を今に残す(右)。フエ風お好み焼き「バインコアイ」(中上)。ファサードが優雅な市民劇場(中下)。スイート宿泊者のみが利用できる39階のザ・レヴェリーラウンジ。絶景とともに、ゆったりとアフタヌーンティーを(左)。



店内の棚という棚には、茶碗、湯呑み、小皿などがずらりと並べられていた。乳白色の地には菊、蓮、トンボなどが伸びやかに、そして繊細なタッチで描かれ、素朴で温かみのある風合いが見る者的心を和ませてくれる。

1990年代後半、日本では女性を中心に「ベトナム雑貨ブーム」が起こった。北部のバッチャン村を産地とする陶磁器「バッチャン焼」もそのひとつ。聞くところによると、そこに至るまでの道のりは険しく、前述のブームがなければ、その存在は忘れ去られたいたかもしれないかったのだった。そのブームの一端を担つたのが、ホーチミンの雑貨店「オーセンティック」である。

## ベトナムならではの文化にふれる

ブランド・バルディの特製で、緑色に輝くマラカイトのモザイクに24金の装飾を施した壯麗なデザイン。また、ゲストがくつろぐオーストリーフチ革のソファ「エスマーラルダ」はコロンボスティールのハンドメイドで、世界に2つしかない。もうひとつ持ち主は、マイケル・ジャクソンだった。レヴェリー(夢想)のことき非日常……。滞在の楽しみはつきない。

## AUTHENTIQUE HOME ●オーセンティック・ホーム

1995年、木製品店として創業。現在は郊外に器と家具、テキスタイルの工房を持ち、現代のライフスタイルに合うベトナム伝統工芸品を発表する。器に描かれた繊細なモチーフはすべて職人が手描きしており、ひとつとして同じものがない。

113 Le Thanh Ton Street, District 1, Ho Chi Minh City, Vietnam  
☎ +84 8 3822 8052  
<http://authentiquehome.com/>



選ぶに迷うほど多様な器が並ぶ。2階にはオリジナルの木製品や布、その他のベトナム人作家による雑貨や衣服などが販売されている。



窯に入れる前の器は白く、なめらかな風合い(右)。フーンさん(写真右)と修業中の子どもたち。彼女にバッチャン焼の魅力を教えてくれた陶器蒐集家とは、当時豊田通商の駐在員だった大橋隆雄さん。「大橋さんに、バッチャン焼の釉薬や絵柄について、詳しく教わりました。何より、ご自身が所有する“本物の美しい器”を見せてもらえたことが大きい」と語ってくれた(左上)。



13~14世紀、バッチャン焼の絵柄や色味はごくシンプルなものだった。往時の器の復興を目指す「オーセンティック」の「Back to Origin」シリーズ(右)。薄く、軽く、不揃いな形とパステルの色彩が斬新な「アマイ」の器(左)。

**使われてこそ残る価値**

フーンさんによれば、バッチャン焼が衰退するきっかけを作ったのはグエン朝(1802~1945年)だという。このベトナム最後の王朝が権力を掌握する以前のバッチャン焼は、野の花のような自然にあるものを、あるがままの姿でデザインに取り込んでいた。やがて、王朝の中心だったフエ王宮では、より華やかな中国製陶器が珍重されてゆく。その名残で、時代が変わっても富裕層は中国製陶器を重視し、バッチャン焼は埋も

「その絵柄は、まさにバッチャン焼を象徴するものです」と教えてくれたのはオーナーのトン・ミン・フーンさんだ。彼女がここを開業したのは20年ほど前のこと。最初のうちは主に木製品を扱っていたそうだが、ある日、店を訪れた日本人の陶器蒐集家に「ベトナムには独自のいいものがある」とバッチャン焼を勧められ、いつしか自らも研究するようになつた。「実は、彼の話を聞くまで国内のプロダクトにはいい印象を持っていませんでした。もともと我が国には手仕事を得意とする国民性があったにも関わらず、時代の流れに翻弄されて、当時はその良さがほとんど失われていたのです」

## SADEC DISTRICT

### ●サデック・ディストリクト

アマイ製品を中心に、ベトナムのスタイリッシュな雑貨をプロデュースするセレクトショップ。本国に戻ったアマイ創業者ふたりの意を受け、現在同店で製作・販売のコントロールをしている。女性に人気のかごバッグや漆器製品、漆器ブランドの商品も揃う。

91 Mac Thi Buoi Street, District 1  
Ho Chi Minh City, Vietnam  
+84 8 3822 9909



ティータイムが楽しくなるカラフルなカップ類。とても薄いため、すぐ割れるのでは…との懸念に、カップ同士をパンパンと叩きながら「ほら、大丈夫でしょう」とスタッフ。約1,200°Cの高熱で焼くことで硬く、丈夫に仕上げていて、電子レンジもOK。軽いので、お土産にもお勧めだ。現在カラーバリエーションは14色ほど。シンプルでナチュラルなデザインは、あらゆるジャンルの料理に合う。



「ザ・レヴェリー サイゴン」のラウンジから見た市街地。日々変化する街の風景の中、サイゴン川の流れは不变だ。

現在のベトナムには数百年以上の歴史を誇る手工芸村が数多く残り、脚光を浴びていないものがあるという。また見ぬベトナム一面をもつて発掘してみたい。バーチャン焼に漂うぬくもりにふれて、思わずそんな衝動に駆られた。

今日のベトナムには数百年以上の歴史を誇る手工芸村が数多く残り、脚光を浴びていないものがあるという。また見ぬベトナム一面をもつて発掘してみたい。バーチャン焼に漂うぬくもりにふれて、思わずそんな衝動に駆られた。

現在フーンさんの店で扱う器は、もとの要素を活かしながら飲み口の厚さなど細部は現代にマッチするよう作られている。「百年続くものづくりをしていきたい」と彼女は語るが、まさに「ものは使われてこそ残る」ということだ。

それをしみじみ実感させてくれたのは、次に訪ねた店で見た淡い色合いの器だった。創業者はベルギー人とオランダ人のふたりの女性。夫の赴任に伴ってベトナムにやってきた彼女たちがバーチャン焼に感銘を受け、「アマイ」というブランドを立ち上げたのだった。

紙をクシャッとさせたようなフォルムにバステルカラーのやさしい色合いは「オーセンティック」で、見たものとはまったくの別物だが、バーチャン村の土を使った器であることに変わりはない。ベトナムで過去の遺産となっていたものを西洋人がすくいあげて発展させる異国の人間だから見えてくる価値があるということの例だらう。

あおりみお◎  
1978年東京都生まれ。ライター。  
出版社勤務を経てフリーとなり、  
男性誌、女性誌、会員誌などで  
後者や文化人など著名人の  
インタビュー記事を手がけるほか、  
食や旅などライフスタイルに関する  
記事を執筆中。

あくゆうすけ◎  
写真家。自然・環境・紀行を中心に  
国内外で撮影を行い、  
機内誌はかしまぎわな媒体で活躍。  
2009年、マレーシア・サバ州観光省主催  
「サバ・ツーリズムアワード」にて、  
海外メディア部門最優秀賞を受賞。  
著書(写真)に  
『決定版 日本水族館紀行』など。

